

■ **米インフレ指標の結果次第でドル/円 152 円台乗せの可能性も…**

既知のとおり、昨日の午前中（27日・日本時間）にドル/円は一時151.97円処まで値を上げる場面があった。午前10時過ぎあたりから値動きが急になったのは、直前に田村日銀審議委員の発言が伝わったことが大きかったようだ。

田村氏は、単に「当面、緩和的な金融環境が継続する」など、既に市場が織り込んでいる幾つかのワードを発しただけに過ぎないのだが、同氏に対して「タカ派寄り」との印象を抱いている市場にとっては少々意外感があった模様。より正確には、そのことを一つの“口実”にドル買い・円売りを仕掛ける向きがあったということになる。

仕掛ける側にしてみれば、カづくでも152円台に乗せて行くことができれば、そこから見える“青天井”はオイシイということになるわけで、今後も折に触れて一気に仕掛けようとする向きが出てくる可能性は大いにある。

ただ、今のところ152円手前のところでは「152円のノックアウト・オプションへの買い仕掛けと防戦売りの熾烈な攻防戦」が繰り広げられており、どちらもそう易々とは道を譲れない。加えて、こうした局面では、やはり本邦当局者らによる口先介入の動きも相応に騒がしくなる。昨日も、ドル/円が152円に迫るなか、財務省と日銀、金融庁が突如「国際金融資本市場に関わる情報交換会」なるものを開催し、一段の円売り・ドル買いを強くけん制した。結果、ドル/円は151円台前半の水準までその水準を切り下げ、ひとまず当局者らはホッと胸を撫で下ろしたことであろうが、むろん「これで一件落着」というわけには行かない。

何より気になるのは、やはり明日（29日）発表される2月の米個人消費支出（PCE）デフレータの結果であり、市場ではインフレの高止まりを示すものになると見る向きが少なくない。なお、同日はパウエル米連邦準備理事会（FRB）議長が発言する機会もあり、グッドフライデーの最中から週明けにかけて、金融市場が少々荒れ模様になる可能性に対しても警戒しておく必要がある。

また、ここに来てユーロやポンドがドルに対して弱含みで推移している点にも引き続き注目しておかねばなるまい。



目下のユーロドルに関しては、左図に見る通り、21日移動平均線（21日線）を下抜けて、同線が下向きになり始めるという弱気のシグナルが点灯している。目先は、一目均衡表の日足「雲」下限が下値サポートとして意識されている模様だが、ひとたび同線をクリアに下抜けてくると、そこから弱気ムードが一段と色濃くなるものと見られる。

同様に、ポンド/ドルにも弱気ムードが漂っており、市場では英中銀（BOE）や欧州中央銀行（ECB）の早期利下げ開始観測が足元で強まっている。既にECBの6月利下げ開始は完全に織り込まれており、市場の関心は「年内あと何回か」に移っている。また、BOEに関しては一部で利下げ開始時期を「5月」と見る向きがあると伝わる。その一方で、FRBの利下げ開始は「6月よりも先延ばしになる」との声も一部では聞かれ、ECBやBOEの政策スタンスとのコントラストが徐々に色濃くなっているようにも感じられる。

当面、ドル全面高の様相が引き継がれるようであれば、ドル/円もイレギュラー・トップを形成して一時的に152-154円あたりまで上値を試しに行く可能性はあると見られる。

（03月28日 10:15）